

お茶の水女子大学

歴史資料館案内

—2007年度オープンキャンパス—



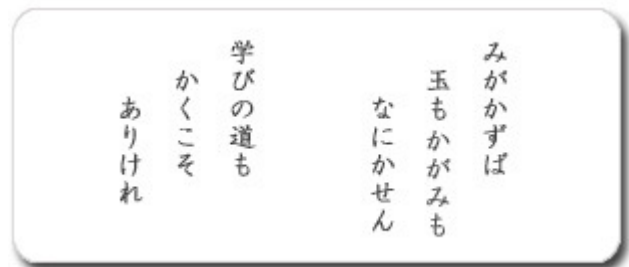
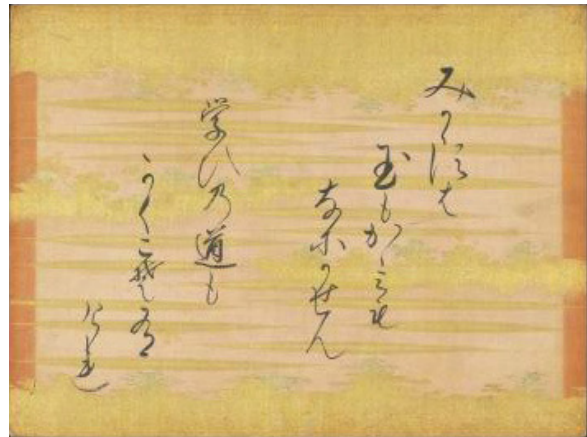
 お茶の水女子大学

Copyright (c) 2007 Ochanomizu University. All rights reserved

「みがかずば」 昭憲皇太后筆 1876年

本学開設にあたり手許金を賜与し女子教育の基を築いた昭憲皇太后により、明治8年(1875年)12月20日に下賜された御歌です。これに式部寮雅楽課伶人の東儀季熙(とうぎ・すえひろ)により、明治11年(1878年)に作曲されたものが本学の校歌となり、わが国最初の校歌として現在まで唄い継がれています。

当初作られた壺越調(いちえつちょう)旋律による墨譜の曲には「学道」という題名が付されていましたが、五線譜に改められた際に題名も「みがかずば」と称されるようになりました。



梨子地桐鳳凰蒔絵御料紙御文匣および御硯箱 江戸後期 (なしじ・きり・ほうおうまきえ・おんりょうし・おんふばこおよび おんすずりばこ)

大正3年(1914年)4月11日に昭憲皇太后が崩御されたことに伴い、同年12月1日に当時の宮内省から御遺物として下賜されました。

実際に皇太后が愛用されていたものと思われ、御用写真師であった鈴木真一・丸木利陽の撮影した明治22年(1889年)の肖像写真にも、後方のテーブル上に同じ図柄の手篋が置かれています。

表には螺鈿(らでん)が施された桐の葉と両翼を広げた鳳凰が精緻な筆遣いで描かれています。文匣の蓋裏(ふたうら)には松竹梅、硯箱の蓋裏には秋草がそれぞれ描き込まれ、全体に丁寧な細工であるところから、江戸後期に制作された一揃いの作品と思われま



Copyright(C) 2006 Ochanomizu University. All Rights Reserved.

「昭憲皇太后像」 矢澤弦月（やざわ・げんげつ）筆 1933年

本作品の原画は、お雇い外国人エドアルド・キョッソーネが明治21（1888）年1月に描いたコンテ画で、実際には、丸木利陽がこれを写真版に複写したいわゆる「御真影」が用いられたと思われます。「明治天皇像」とともに日本画の技法で描かれた天皇・皇后の肖像画は極めて珍しく貴重です。戦前まで徽音堂の舞台右手に掛けられ、儀式の時にのみ覆いがはずされました。

矢澤弦月（1886-1952）は長野県諏訪市に生まれ、本名は貞則。久保田米僊、寺崎広業に師事し、東京美術学校日本画科を卒業後、大正10（1921）年より本学で図画を担当しました。



桂袴（けいこ）

堀口きみこ先生（東京女子高等師範学校教授、明治40年理科卒業）が、昭和3年（1928年）11月10日に行われた昭和天皇の御即位大礼式典に、女子奏任官代表として参列した際に着用したもので、日本の伝統的な宮廷服の装いです。

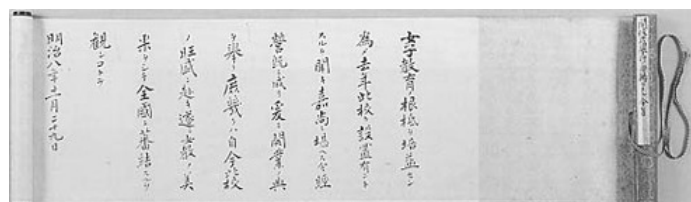
* 奏任官

旧制の官吏の身分で内閣総理大臣が奏薦して任命された、三等官以下の高等官の称。一・二等の高等官は勅任官と称され、天皇命の勅任による叙任。



「皇后陛下令旨」（こうごうへいかりょうじ）

明治11年（1878年）11月に、皇后（昭憲皇太后）の行啓を仰いで、開校式が挙行されました。このときに、賜った「女子教育振興の令旨」です。



「花蝶図」 荒木十畝（あらかき・じっぼ） 1920年代後期

作者の荒木十畝(1872-1944)は長崎県大村市に生まれ、本名は朝長悌二郎(ともなが・ていじろう)。20歳で上京し日本画家の荒木寛畝に師事し、のち娘婿となりました。近代の日本画壇を率いた人物として横山大観らと並び称されます。明治30年(1897)から養父荒木寛畝が教鞭をとる本学の講師となられ、明治34年から助教授、のちに東京高等師範学校(現在の筑波大学)教授となりました。



牡丹の花にとまる揚羽蝶を、墨と金という無彩色のみによって描いた作品です。柔らかな牡丹の花びらを、墨の濃淡を用いて巧みに描出し、金彩を用いた花芯と揚羽蝶の羽の先に配された、わずかな朱の色が画面にアクセントを与えています。

確かな技量に基づく写実性と洗練された色彩感覚、やまと絵の伝統的手法をしっかり継承した画面構成の確かさなどに支えられ、小品ながら爽やかな画風を示している作品といえます。

「百合図」 武村耕靄（たけむら・こうあい） 1885～95年

作者の武村耕靄(本名千佐)は、女子師範学校の創設当初から絵画担当の助訓(現在の助教授に相当)として就任した女性画家で、嘉永5(1852)年11月25日仙台藩士の娘として戸芝口に生まれました。山本琴水・春木南溟について文晁派(注:谷文晁(たに・ぶんちょう)、江戸時代後期の日本の南画家。古画の模写と写生を基礎に南画・北画・洋風画などを加えた独自の画風を生み出し、関東文人画を確立した)の南画を習得するかたわらで、川上冬崖(かわかみ・とうがい)の開設した洋画の画塾であった聴香読画館(ちょうこうどくがかん)に入門し、西洋画の技法も学んでいます。



画面右側に大きく描かれた百合を中心として、オダマキやアゲハ蝶など夏の情景が構図の右下側を占めています。一方、画面左にはススキやワレモコウなど秋草が一群としてやや小さく表され、遠近法を用いながら構図全体に奥行きを感じさせる試みがなされています。

本図の制作目的は明らかではないものの、鑑賞画というよりもむしろ学生たちにさまざまな技法を教授するために描いた、絵手本としての性格を帯びていたと推察されています。花鳥画を得意としたといわれる作者の多彩な技法が看取できる作品である。制作年代は不明ですが、明治20～30年頃ではないかと推測されます。

「女院」西村雅之（にしむら・まさゆき）1932年

この作品は、昭和7年（1932年）に制作された彩色木彫で、同年9月に開催された第13回帝国美術院第13回美術展覧会に出品されています。本学には、帝国美術院第6回美術展（大正14年（1945年））に出品された「羅刹女」（現在附属高等学校に展示）とともに昭和8年に納入されました。桂材の一木造りで、僧衣の女性が左手に経巻、右手に数珠を持つ姿で表され、全体に淡彩が施されています。作者の西村雅之（1884～1942）は、近代日本彫刻で名高い高村光雲（たかむら・こううん）の門下で、昭和初期に活躍しました。木彫のほか、一華五葉という名前の能面作家としても知られ、高い評価を受けています。尼僧姿で表された本像は、平家滅亡後に出家した建礼門徳子を表しているものと思われます。



「白鳥」船越保武（ふなこし・やすたけ）1932年

作者の船越保武氏は、大正元年（1912年）12月7日、岩手県二戸郡に生まれ、幼少時に兄から借りた高村光太郎訳の『ロダンの言葉』を読み耽るうちに彫刻家を志すようになりました。昭和11年（1936年）に東京美術学校彫刻科塑造部に入学しました。昭和14年に東京美術学校彫刻科を卒業する頃から独学で大理石彫刻を始めたようです。

昭和25年（1950年）に家族全員で疎開先の盛岡市四ツ家教会で洗礼を受けた後は、一貫してカトリック信仰を作品の中心課題におき、人間の内面を凝視した、崇高で清潔な作風を確立したといわれています。代表作としては昭和37年に制作された「長崎26

殉教者記念像」、田沢湖畔に立つ「たつこ像」（昭和43年）、「病醜のダミアン」（昭和50年）などがあります。

昭和62年（1987年）1月に脳梗塞で倒れ、右半身が不自由になったものの左手で制作を続け、平成14年（2002年）2月に90歳で逝去するまで制作に対する意欲を失いませんでした。



大理石で制作された本作品は、昭和25年（1950年）10月に本学の所蔵となったものです。首を左後方にのぼし羽の間に嘴をうずめる仕草の白鳥は、厳寒期の湖面に浮かぶ姿を想起させ、作者が太平洋戦争末期の昭和20年から6年間を過ごした故郷の盛岡滞在中に制作されたものと思われます。

本作品が本学に納入された当初、洋式作法室に設置されていたとの記録が残っていますが、同室が食物研究室に改修されたことに伴い、本学附属図書館のロビーに展示されることになり（平成6年9月まで）、その後は図書館会議室に設置されていましたが、大学資料館が開設されたことに伴い、平成18年（2006年）に久しぶりに元の設置場所にお里帰りしました。

「幼稚保育図」 武村耕靄（たけむら・こうあい）筆 1890年

「百合図」を描いた武村耕靄の作で、草創期における本学の附属幼稚園での保育の様子を表しています。この作品は、明治23年（1890年）の日本美術協会秋季展覧会に出品されました。昭和30年（1955年）本学の創立80周年記念式典にあわせ、高松宮家から下絵とともに下賜されました。



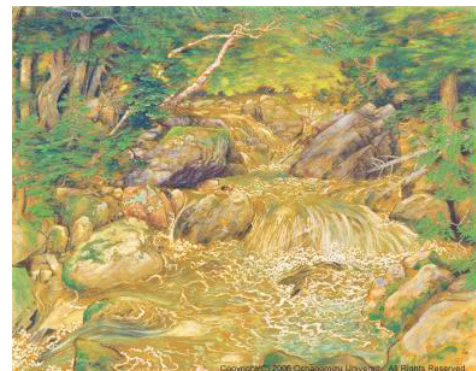
「躍動」「静寂」 山元春汀（やまもと・しゅんてい）筆 1934年

作者の山元春汀(1887-1985)は滋賀県大津市生まれ、13歳の頃から叔父の日本画家であった山元春挙(やまもと・しゅんきょ)に師事し、西洋画の空間表現を取り入れた雄大な華麗な風景表現を受け継ぎました。

大正3年(1914年)に文展に初入選した後は、昭和3年(1928年)まで毎年文展・帝展に連続入選を果たし、昭和3年から9年までは帝展推薦(無鑑査)という輝かしい画歴を重ねられました。

しかし、師春挙が昭和8年(1933年)に没してからは、晩年の叔父から受けた助言に従い、自らの精神性を追求するために中央画壇を離れ、昭和10年からは画号も櫻月(おうげつ)と改めたばかりでなく、山中湖畔にアトリエを構え、富士山をモチーフにした作品を50年余にわたってひたすら描き続けました。

本作品は昭和11年(1936年)春の帝展に出品されたもので、山間を迸る溪流を静と動という対比的な姿として表しています。師春挙の晩年の作風にも似て、自然に対する憧憬と畏怖の入り交じった力強い筆致を感じさせます。春汀という画号を記して描かれた最末期にあたる作品で、筆者の画風の転換期にあたる極めて注目すべき作品といえます。本学の所蔵となった由来については、残念ながら詳しくありません。



▲躍動（溪間二趣のうち）



▲静寂（溪間二趣のうち）

「郊遊会図巻」 1894年
(画) 荒木寛畝(あらき・かんぼ) (詞書) 小中村義象(こなかむら・よしかた)

本作品は、明治27年（1894年）5月6日に举行された東京女子高等師範学校の教師・学生たちの目黒祐天寺まで日帰りの遠足の模様を絵巻仕立てにしたものです。題簽（だいせん）欠落のため「遠足の日」と称されていましたが、近年の調査により本学では遠足を「郊遊会」と称していたことが明らかになり、「郊遊会図巻」の題名に改められました。



巻頭に校門を出発する一行の姿が描かれていますが、先頭に行く正装の男性は当時の摂理（校長）秋月新太郎と思われます。

挿画を担当した荒木寛畝（あらき・かんぼ）は江戸生まれ。花鳥画を得意とし、明治26年（1893年）から本学教授となられました。養子の荒木十畝（あらき・じっぽ）、さきほどの部屋の暖炉の上の絵画「松図」の作者、と共に、親子二代で本学に奉職されました。

詞書の小中村義象(こなかむら・よしかた)は、本学で国語・和歌を講じた歌人・国文学者です。東京帝国大学古典講習科卒業され、国文・和歌・古代法制に精通していました。

「隅田の家つと」 1894年
(画・詞書) 武村耕靄(たけむら・こうあい)

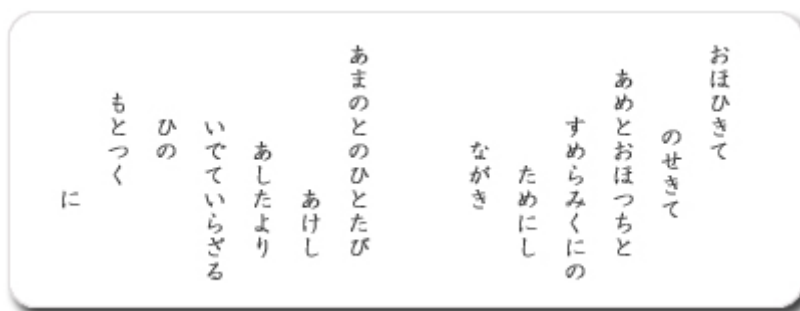
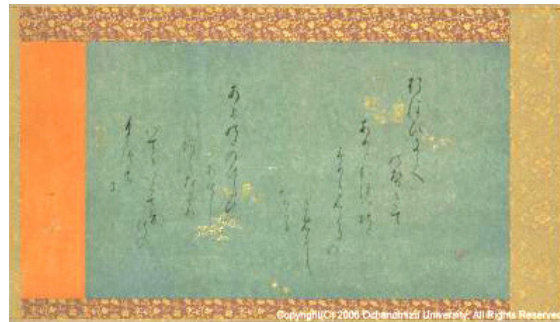
本作品は、明治27年（1894年）7月に隅田川で行われた職員慰労の船遊びの様子を描いたものです。

お茶の水にあった学校の下を流れる神田川から船を浮かべ、隅田川に漕ぎ出した後の観月会の様子が記録されています。



尾上柴舟（おのえ さいしゅう） 短歌二首掛軸

尾上柴舟は、明治9年（1876年）に岡山県津山市に生まれました。柴舟は、平安朝の格調高い書風を現代に蘇らせた書家として大変有名ですが、その他にも歌人・教育者・国文学研究者といった様々な方面で数多くの業績を残されています。
明治35年（1902年）から東京女子師範高等学校に奉職され、昭和21年（1946年）本学の名誉教授とされました。



中村正直（なかむら まसानお）掛軸

中村正直は、天保3年（1832年）江戸の幕臣の家に生まれました。昌平坂学問所に学び、安政2年（1855年）学問所教授明治8年（1875年）東京女子師範高等学校の初代撰理（校長）に任命され、明治11年（1878年）までその職にありました。その後、明治23年（1890年）3月から再度、本学の校長をつとめ、在任中の明治24年（1891年）60歳で逝去されました。

中村正直は、明治3年（1870年）にサミュエル・スマイルズの「Self Help」を『西国立志編』として翻訳出版しましたが、同書は100万部以上を売り上げ、福沢諭吉の『学問のすすめ』と並ぶ大ベストセラーとなりました。

本学には、中村正直による7本の軸が残されていますが、今回はそのうちから1本を展示しました。

